■海外技術研修員受入事業
■県費留学生受入事業

海外技術研修員受入れ事業

海外技術研修員は開発途上国からそれぞれの国の中堅者となり得る人材を現地からの推せんにもとづき県で受入れ、それぞれの希望する職種によって、各研修機関（引受け企業）で研修を実施しています。

昭和四十六年に本事業が開始されて以来今日まで三十一名（年平均八名）の研修員を海外、主として東南アジアの国々から受入れています。国別にみると、インドネシア二名、タイ十名、韓国四名、ブラジル八名、シンガポール一名、香港二名、マレーシア一名、フィリピン三名となっています。これらの研修員は、県内に於ける生活を通じて風俗習慣を体験し、あわせて開発途上国の経済開発に役立つ必要な技術を修得して帰国しています。

又、本県との貿易並びに友好関係について、これら研修員はそのパイプ役的な役割を積極的に果たしています。

県費留学生受入れ事業

県費留学生受入事業の始まりは、ブラジル在住の本県出身移住者からその子弟のために日本特に母県での教育を是非実現させてもらいたいとの強い要望に基づき、昭和三十七年度第一回を皮切りに毎年二～三名を主としてブラジルから受入れ、その総数は本年で十六名に達しています。留学生としての要件は、本県出身移住者の日系人子弟で、本県で修得した留学効果を充分発揮できる者となっています。留学機関は熊本大学をはじめ各大学で留学期間は一年間です。

又、県では昭和五十年度からは新たに米国ハワイ州から留学生一名を受入れるべく現地県人会との間で調整を行っています。

フイリピン
海外技術研修員
エドアルド・コルデロ
（24歳）

私の感じた日本

私が、日本に来て一番強く感じたことは、日本のいろいろな産業が、非常に発達しているということです。たとえば、電気や機械の発達はすばらしいと思います。又、そのほかの科学の発達もアメリカと同じように秀れていると思います。だから日本の人々は、このように暮らしやすく便利な国に住むことができて大変幸わせだと思います。

次に、日本の人々は大変親切で、言葉や習慣の違いがたくさんある中で、いろいろなことをわかりやすく、ていねいに教えてくれます。それで私が、日本に来てからたくさんの良い友達を得ました。又、日本は大変美しい国だと思います。緑におおわれた山々、美しい川、公園など……。おとずれる場所がたくさんあります。私は、今までにたくさんの有名なところに行きましたが、その中でも、一番印象に残っているのは、阿蘇と熊本城です。

▲伝習農場で技術習得中のコルデロ君

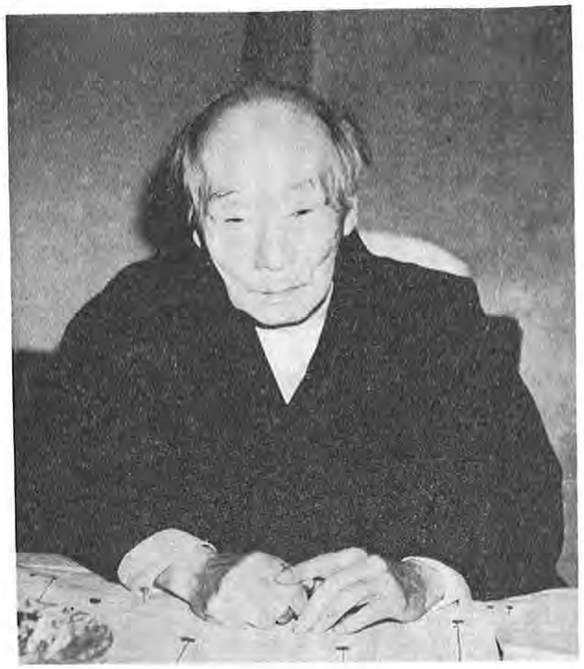
私は、今農業機械の研修を受けているわけですが、この研修を終えてフィリピンに帰ってから日本で勉強したことを、私の国の若い人々に教えたいと思います。例えば、トラクターの使い方や、それぞれの部分の点検、又トラクターの組立法など……。私が、日本で勉強したこと、全て私自身や、私の国にとって今後大変役に立つと思います。

日本とフィリピンのお互いの友好にとって、このプログラムは、大変有意義であり両国の若い世代の人々の友好のためにも、今後是非続けて欲しいと思います。この研修が終っても、両国の経済の発展のためばかりではなく、他の国々がますます平和で、住みよい国になると確信します。だから私は、このプログラムが終って、フィリピンに帰ってから私の国の人々に、このプログラムが非常にすばらしいと言うことを、心から話したい気持で一ぱいです。

最後に、私に研修を受けさせていただいた県知事さん始め多くの皆さんに、心から感謝致しています。

この人と30分

このコーナーは県出身者で各界のトップとして活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などをお聞きするものです。



根情を持て

漆工芸家
高野松山

東大附属小名川植物園裏にある閑静な住宅街に住む漆工芸の第一人者で人間国宝の高野松山さんをたずねた。通された客間には今どきめけらしく火ばちが置いてあり木炭があかあかと燃えていた。伝統工芸を守ろうとする名匠の生活の一端がうかがえる気がした。

高野さんは、熊本弁丸出しの早口で蒔絵を語り伝統の漆工芸の衰退を嘆き、波乱多い半生を語った。

作品を説明する表情にも作品にかける作家としてのすさまじい執念をかい間みたような気がした。そして「人間は根情が大切」と力説した。

本籍、熊本市池上町、明治二十二年五月二日生れ、八十五歳、飽託郡立工業徒弟学校漆工科から京都市立美術工芸学校描金科に進み、東京美術学校漆工科を卒業後同研究科に学んだ。昭和三十二年に重要無形文化財（人間国宝）に指定された。勲三等瑞宝章。熊本県近代文化功労者。現在日展参与。本名重人。

「あそんじょ」で反抗心を抱く

私の出身は熊本市池上となっているが本当は阿蘇で生まれた。親爺が熊本師範出で、田舎ばかり回っていたので、丁度阿蘇にいた時に生れました。

その時代は、「あそんじょ」といって非常に軽蔑されたので反抗心が起きてくるわけですよ。ハハハハ…。東京の県人会も阿蘇に入っている。本籍は熊本市の池上となっているが、家は京町の教会の近くにあったが、十年の役の時に焼失したので、あちこち逃げ回って高橋に落ち着いた。小学校は高橋で、小学校に入学した時は丁度日清戦争がはじまっていた。毎日毎日、戦争ごっこばかりして勉強するものはいなかったですよ。学校は遊ばせるところぐらいしか思っていなかった。あんまり学校の成績が悪いので、人吉で小学校の校長をしていた親爺に一時預けられたが、いっだん悪くなったので、また熊本市へ追い帰された。

その頃から紙細工、木彫りなど細工ものが好きだったので、あいつは学問はだめだからといって小学校をおえると飽託郡立徒弟学校の漆工科へ入れられた。熊本は非常に職人を軽蔑するところで、軍人と役人がいばっていた時代であったから、中学校に入った友達と途中で会うと「おい職人下駄塗れ石箱塗れ」と言われ喧嘩したもんですよ。